

サミール・アミンのウクライナ・ロシア危機論：世界帝国主義3人組の政策と対立するユーラシア計画

サミール・アミン著、脇浜義明訳 MR onlinme. 2022年5月7日

この論文はウクライナ戦争の源である2014年の西側画策のマイダン・クーデターの時に書いたもの。著者のアミンが今のウクライナ戦争を解説になるとして、MR online に投稿したもの。一訳者。



State flag of Ukraine behind a wall of anonymous protesters in Kyiv, Ukraine (February 18, 2014). By [Mstyslav Chernov/Unframe](#) – Own work, [CC BY-SA 3.0](#), [Link](#).

現在世界は、歴史的帝国主義中心部（米国、西・中央ヨーロッパ、日本 — 以後三人組と呼ぶ）が、次に述べる二項目の結合を通じて地球を排他的に制御しようとする試みに牛耳られている。その二項目とは、

1) いわゆるネオ・リベラル経済グローバリゼーション：これによって三人組の多国籍金融資本が世界中の事柄をすべて自分たちの利益になるように操作するのである。

2) 米国と米国に追従する同盟国（NATO と日本）によるグローバル軍事支配：これによって三人組支配体制に抵抗またはそれから逸脱しようとする国を懲罰する。

それ故に、三人組以外の国 — 三人組の政治経済戦略に完全屈服したサウジアラビアやカタールのような国を除き — は敵国乃至は潜在的敵国となる。西側メディアが「国際社会」と呼ぶものは G7 にサウジアラビアにカタールを加えたもので、その他の国々は、たとえそ

の国の政府が三人組に結びついていても、その人民が三人組への従属を拒否するかもしれないので、基本的には潜在的敵国である。

2. だから、ロシアは敵国である。かつてのソ連が何であったにせよ（社会主義国かそれ以外のものだったか）、それは資本主義/帝国主義から独立して発展しようと試みた国だったので、敵であった。そのソヴィエト・システムの崩壊後、資本主義となったロシアは西側から敵対視されない — 敗戦した旧ファシスト国ドイツと日本がそうであったように — と考えるロシア人がかなりいた。しかし、その人たちは、ドイツと日本はソ連の独立路線という西側にとっての脅威を破壊するために利用されたことを忘れていない。ソ連崩壊後も、西側の帝国主義はロシアの完全屈服、ロシアから帝国主義に逆らう力を完全に奪い取ることを戦略目標にした。

3. 現在のウクライナ悲劇の展開は三人組のこの戦略がもたらした現実である。三人組は「ユーロ・ナチ暴動」と呼ぶべきクーデターを画策した。歴史的に双子の姉妹であるロシア人とウクライナ人を分離させようと、地域のナチ勢力を利用したのである。

西側メディアはこのクーデターを「民主主義促進」と報じたが、真っ赤な嘘だ。いまだかつて三人組が民主主義を促進させた例はどこにもない。それどころか、彼らは地域の反民主勢力（時にはファシスト）を使って、彼らにとっての敵国政府を破壊した。旧ユーゴスラビア — クロアチアとコソボ — やバルト海諸国や東欧（特にハンガリー）では準ファシストを使った。そうやって東欧諸国を EU に「統合」したが、それは平等なパートナーとしてではなく、西・中央ヨーロッパ帝国主義の「半植民地」としてである。このヨーロッパの東西関係は米国とラテンアメリカの関係に若干に似ている。また、グローバル南では、三人組は超反動的な政治的イスラム武装集団などの反民主主義的勢力を利用した。イラク、シリア、エジプト、リビアが三人組の手国主義的プロジェクトの犠牲になった例である。

4. それ故、我々としては、西側によるウクライナの（及びトランスコーカシアや中央アジアの旧ソ連邦共和国の）半植民地化に抵抗するプーチン政権を支持すべきである。バルト海諸国の悲劇を繰り返してはならない。三人組とそれに従属するヨーロッパ諸国から独立した「ユーラシア・コミュニティ」と建設する政治目標を支持すべきである。

しかし、この政治目標は、ロシア人民の理解と支持がなければ絶対に成功しない。ロシア人民の支持は、たとえ進歩的装いで凝らしても、排他的ナショナリズム、ショービニズム的なロシア民族主義では、決して得ることはできない。ウクライナのファシズムは、ロシアのファシズムに対抗することはできない。人間中心で労働者階級の利益になる社会・経済的国内政治を推進しないと、人民の支持は得られない。

「人間中心で労働者階級の利益になる」政策という言葉で私が意味しているのは、必ずし

も「社会主義」あるいはソヴィエト・システムの再建ではない。ここで旧ソ連体制の是非を論じる余裕はないが、少しだけコメントしたい。あの真正のロシア革命で生まれたのは、社会主義へ向かう第一歩という可能性をもった国家社会主義であった。スターリン以降その国家社会主義は国家資本主義へ向かった。（ここで国家社会主義と国家資本主義の重大な違いを説明する余裕はない） 1991年に国家資本主義ソ連が解体し、私有財産制に基づく「普通の」資本主義となった。これは、現在の資本主義諸国に見られるように、主として金融独占体の私有財産、ロシアの場合新旧のノーメンクラトゥラによって構成されるオリガーク（寡頭）である（三人組の寡頭と同じ）。

10月革命のときに見られた創造的民主主義の実践は、時の経過とともに、政治権力の管理・支配に取って代わられた。政治権力は多少労働者階級に社会的権利を与えたものの、大衆的脱政治化を生み出し、政権はますます専制的、時には犯罪的な脱線に走ることもあった。民衆の脱政治化と民主主義的権利の軽視の上で野蛮な資本主義は成立していた。

この野蛮な資本主義はロシアだけでなく、旧ソ連邦共和国でも支配的である。西側のいわゆる選挙民主主義は、ロシアよりウクライナに大きい影響を与えた。しかし、名目的選挙を通じて大衆を支配するのは決して民主主義ではなく、資本主義初期のブルジョア民主主義、西洋の「伝統的民主主義」と大きく異なる「茶番劇」ショーであった。なぜならば、権力は常に寡頭が握り、寡頭の利益になるように選挙も政治も行われ、実質的には独裁制であったからだ。

だから、人間中心の政治は、「リベラル」レシピとそれに繋がって演出される選挙仮装パーティーと可能な限り無縁でなければならない。選挙仮装パーティーは反動的な社会政策に正当性を与えるだけだ。私が提案したいのは、「リベラル」レシピに代わって社会的次元（社会主義的とまでは言わない）を重視する新しい国家資本主義へ移ることだ。経済を社会的に管理できる体制、経済的課題に対応する民主主義の創造へ向かえる道となる新型国家資本主義体制へ移行することを提案したい。そういう道を歩むことで、現代ロシアが抱える内的矛盾、即ち三人組帝国主義からの解放を目指す進歩的対外政策と反動的な国内政策との間の矛盾を止揚できるかもしれないのだ。そういう意味で国家資本主義への道は必要で、可能である。国民の広範な大衆的支持が伴えば、ロシアの支配階級を構成する多くの部分も協力せざるを得なくなるだろう。この道はロシアだけでなく、ウクライナやトランスコーカシアや中央アジアにも当てはまる。そうなれば、西側への従属から解放される本当のユーラシア・コミュニティが形成され、新しい世界体制構築の強力なアクターとなるであろう。

5. ロシアの国家権力がネオ・リベラル枠内にとどまっている限り、独立的外交政策は必ず失敗し、ロシアが本当の意味で重要な国際的アクターとなる機会もないであろう。ネオ・リベラリズムがロシアにもたらすものは、社会・経済的な逆行という悲劇、一種の「ルンペン的发展」、グローバル帝国主義体制の中での従属的地位である。ロシアは三人組に原油、天然ガス、その他の天然資源を提供するだけの国となる。ロシア産業は西側金融独占資本の下

請けの役割を担わされることになるだろう。

現在のロシアはまさにそういう地位に近い状態である。だから、国際的な場面で独立的行動をしても非常に弱く、すぐに「制裁」で攻められる。西側の「制裁」によって、ロシア経済を支配するオルガーキー（寡頭）は三人組の独占資本と結び付く可能性がある。ウクライナ危機に関連して「ロシア資本」が外国へ流出していることが、その危険を例証している。資本の動きを国家統制するためにも、国家資本主義が必要である。

2014年3月 モスクワにて